

# おふでさきの 世界を歩く

第6回

## 山澤昭造

【やまとわ しょうぞう】

本部准員  
天理教校本科研究課程主任

一号21—44 (その2)

「一号31—44  
「あくじ」を退ける

これまでのざんねんなるハなにの事

(一) 31

あしのちんばが一のさんねん

(一) 32

このあしハやまいとゆうているけれど

(一) 33

やまいでハない神のりいふく

(一) 34

りいふくも一寸の事でハないほどに

(一) 35

つもりかさなりゆへの事なり

(一) 36

りいふくもなにゆへなるどゆうならハ

(一) 37

あくじがのかんゆへの事なり

(一) 38

このあくじすきやかのけん事にてハ

(一) 39

ふしんのしやまになるとこそしれ

(一) 35

このあくじなんばしぶといものやどて

(一) 36

神がせめきりのけてみせるで

(一) 37

このあくじすきやかのけた事ならバ

(一) 38

あしのちんばもすきやかとなる

(一) 39

あしきいかすきやかなをりしたならバ

(一) 40

あとハふしんのもよふハかりを

(一) 41

一寸はなし正月三十日とひをきりて

(一) 42

をくるも神の心からとて

(一) 43

そばなものなに事するとともへども

# おふでさきの世界を歩く



さきなる事をしらんゆへなり

(一) 40)

そのひきてみへたるならばそばなもの

(一) 41)

神のゆう事なにもちがハん

(一) 41)

いま、でハ神のゆう事うたこふて

(一) 42)

なにもうそやとゆうていたなり

(一) 42)

このよふをはじめた神のゆう事に

(一) 43)

せんに一つもちがう事なし

(一) 44)

だんくとみへてきたならとくしんせ

(一) 44)

いかな心もみなあらへれる

(一) 44)

## 〈当時の「おやしき」の様子〉

前の段落で「やしきの掃除」を仕立てると述べられていましたが、それは具体的にどうすることなのか。それが示されるのが、この段落です

31で、「これまでに神が残念にもどかしく思つていることは何か」というと、いま秀司の足の悪いに現れていることが第一の残念なのだ」と述べられ、その後で、32と33で、その足は病ではなく、神の立腹が長年積もり重なつたうえでのものだと言われています(※1)。

さらに、34では、その立腹は何に由来するかとい

うと、「あくじ」が退かないからであると言明かされているのです。

この一連のお歌を理解するためには、当時の「おやしき」の状況を振り返る必要があります。『おふでさき註釈』39の註には次のように記されています。

**註** 秀司先生は長年独身で正妻無く、おちゑとい

う内縁の妻があつて、音次郎おとじろうという子まであつた。そしてお屋敷に同居せしめておられたが、

これは元々親神様の御思召おぼしめしに沿わぬ悪事から

始まつたものであつたからして、このおちゑを

実家へ送り帰かかえすようとに仰せられたのである。

秀司様にはおちゑおちゑという内縁の女性があつて、この方を「おやしき」から実家へ送り帰すよう、教祖は秀司様におつしやつていたと記されています。

おちゑとの間に、数え九歳の音次郎しゆうじろうという息子がいたことからも、この女性との縁は長いものであつたことが分かります。文献によつては、立教直後から三十年以上も続いていたと伝えているものもあります(※2)。このおちゑおちゑが、明治に入つたころ、子供を連れて中山家へ移り住むようになつたと言われています(※3)。秀司様にしてみれば、内縁関係で



←「おふでさきの世界を歩く」のバックナンバーへ

あるとはいえ、長年の縁がある女性を送り帰すよう諭されているわけであり、なかなか得心がいかなかつたに違いありません。周囲の人の中にも、「教祖は何をなされるのか」と疑問に思う人がいたと想像されます。

### 「あくじ」とは何か

ここで、注意したいことは、「おふでさき」において、教祖は何を「あくじ」とされているのかということです。正式な結婚でなく、内縁関係であることを「あくじ」と言われているかというと、そうでないよう思います。

お歌に込められた神意を読み取るためには、教祖が言われる「あくじ」の意味を、「おふでさき」の中に求めることです。このことに関しては、澤井勇一『おふでさきを読む』(道友社、立教16年)が読み方を明確に指示してくれています。

同書によると、「あくじ」という言葉は、第十三号にもう一度、出てきます。

わがみにしりたものハあるまい (十三 41)

この心神がしんぢつゆてきかす

みないぢれつわしやんしてくれ (十三 42)

と断られたうえで、「あくじ」の心とはどういう心であるかということが、第十三号43以下のお歌で示されていくのです。

せかいぢういぢれつわみなきよたいや

たにんとゆうわざらにないぞや (十三 43)

このもとをしりたるものハないのでな

それが月日のがねんばかりや (十三 44)

高山にくらしているもたにそこに

くらしているもをなしたまひい (十三 45)

それよりもたんくつかうどふぐわな

みな月日よりかしものなるぞ (十三 46)

それしらすみなにんけんの心でわ

なんだかびくあるとをもふて (十三 47)

ここでは、「かしもの・かりもの」の教理をもと

に、「世界中は一れつはみな兄弟姉妹で、他人とい

うは「人もいない」「高山に暮らしている者も谷底に

暮らしている者も同じ魂である」と述べられています。そして、こうした真実に反する生き方、つまり

けふまでわどんなあくじとゆうたとて  
「一れつ兄弟姉妹」ということを知らずに、人を他

## 「おやしき」について

先人の手記には、「お屋敷の理」について、次のように記されています。

このやしきを、おぢば／＼、もとの、ぢば／＼、おやの、そば／＼、といふてくる  
こどもの、こゝろは、よきも、あしきも、みなうつる。それ、かみがうけとる。うけ  
とれば、それかやしといふ。ちやうど、かゝみのまへにゆけば、わがすがたが、かみにうつり、また、わがのために、みゆるやう  
なもの。それでかゞみやしきといふ。また、ひとつ、そのよりくるこどもを、どこにへ  
だてないのが、これ、しはうしやうめんといふ。

(略) このかゞみやしきにへだてのないのが、しはうしやうめんなら、いちにん／＼のりもおなじこと。いかなるものにも、へだてせず、いつもかはらぬ、まことのこ、

人として隔てをして暮らす生き方、同じ魂であるの  
に人と人の間で高低があると思う心、それらを「あ  
くじ」の心として教えられていることが分かります。

『おふでさきを読む』においては、次のように述べ  
られています。

「あくじ」については、『おふでさき』の第一号  
で、まず事柄をとおしてお示しくださり、ずっと

あとの第一三号になつて、「あくじ」の説明をして  
いただいている。(略)  
他人として、へだてをして暮らす。それが、「あ  
くじ」である、とおおせられている、と思います。

(略)

当時、家の格式がどうであるとか、家柄がどう  
であるとか、そのように「家」というものを、大

ろをもつて、せかいから、なるほどのひと  
やなあ、なるほどのものやなあといはれる  
やうに、それ、しはうしやうめんの、こゝ  
ろでなくばならうまい。(『正文遺韻抄』道  
友社、昭和45年、215—216ページ)

ここでは、「鏡やしき」という言葉とともに、  
に、「四方正面」という言葉で、「おやしき」  
とはどういう所であるかといつことが述べら  
れています。寄り来る子供に隔てないのが「四  
方正面」であり、それが神の心である。神の  
ように隔てをせず、いつも変わらぬ誠の心で、  
世の中の人から成程の人やなあと言われるよ  
うな「四方正面」の心でいることが、「おや  
しき」に住む一人ひとりの心がけでなければ  
ならないと諭されています。

このほかにも、『稿本天理教教祖伝逸話篇』  
には、「おやしき」についてふれられた逸話  
があります。

このように隔てのない、誠の通り方は、教  
祖が立教以来、長い年限をかけて教えられて  
きた生き方です。

事にして生きた時代です。そのことに固執される。

そちらのほうに意味をみつけられた。そして、おやさまのおはなしくださること、あるいは、身をもつてお教えくださることには、すこしも意味をみつけることができなかつた。

（澤井勇一『おふでさきを読む』83—84ページ）

このような点を踏まえると、第一号のこの場面で言われる「あくじ」とは、「隔て」をする生き方、具体的には、教祖のおっしゃることを疑つて「なにもうそやとゆうていた」（42）、おちゑの心づかいや生き方のことを指しているのではないかと考えられます。教祖は、おちゑを出すことを通して、「おやしき」の中からそのような「あくじ」の心を退かそうとされたのではないでしようか。

おちゑに関して、よく「魂のいんねんがなかつたから、おやしきにおられなかつたのだ」と言われることがあります。心づかいがかなわなは誰しも持つているものです。心づかいがかなわなかつたため、おれなくなつたというのが、「おふでさき」から読み取ることのできるところです。ただ、それについても教祖は、おちゑの心づかいを長年に

わたつて見てこられたうえで、もうこれ以上置いてはおけないというところから、出すことにされたのではないかと想像します。

秀司様は、このお歌に従い、おちゑと音次郎を、（明治二年の）正月三十日と日を切つて、川原城村（現在の天理市川原城町）に送り帰されましたが、おちゑは、日ならずして出直したそうです。

44では、「だんだんと、神の言つたことが現れて、見えてきたら、得心をするようにせよ。どんな心もみな現れるのだ」というように、おちゑの心づかいを身上として現すので、これを見て、教祖の言わることをよく得心するようになると述べられています。

この出来事を通して、秀司様はじめ周囲の人々は教祖の言われたことに間違いはないのだと納得するようになつたと言われています。

「おさしづ」には、

このやしき神やしきと言う。どのようにも言う。

皆伝えるよう。すつきり掃除が出来ねば寄る理はない。（略）すつきり掃除出来んようでは払うまでやない。めん／＼より払われる理を捨てるのやで。

（明治24・11・15）

と記されています。おちゑの事柄を通して、教祖は、「おやしき」とはどのような所で、どのような生き方をしないといけないのか、ということを周囲の人々に徹底して伝えていこうとされたのではないでしようか。

「みかぐらうた」に、

なにかこゝろがすんだなら

（八下り目 7）

はやくふしんにとりかゝれ  
と、「心が澄んだら、ふしんに取り掛かるようにする」と歌われています。これから「つとめ」を本格的に教え、「世界のふしん」に取り掛かっていくにあたつて、まず「ふしん」の邪魔になる「あくじ」

※1 ここでは、秀司様の足が長年悪いままであることを言われているのではなく、このときの足の痛みに対して言われているのではないかと理解している。

なお、秀司様の足が完治せずにきていることについては、

後にそれは「つとめの試し」  
が掛けられているからである  
と教えられている。このこと

ことだと理解する。

※2 『改訂正文遺韻』 天理  
教山名大教会史料部、平成26  
年 243ページ参照。

については、第十一号、第十  
五号で詳しく言及されている。  
したがつて、37のお歌で  
「あくじ」を退けたら「あし

の心を「やしき」から退け、「やしき」に住む人々の心を澄まそとされたのです。「つとめ」という言葉こそ使われてはいませんが、世界一れつをたすべきたいとの親心から、「つとめ」の完成に向けて、「やしきの掃除」に取り掛かられたのです。

## おふでさき の世界 を歩く



作集第六卷 神の出現とその  
周辺』道友社、昭和54年、145  
ページ参照。